The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

チャンドラキールティの仏身論

太田蕗子

はじめに　インド中観派の論師であるチャンドラキールティ（Candrakīrti, ca. 600-650）は，『入中論』（*Madhyamakāvatāra*(*-bhāṣya*)）の第12章「仏地の徳性」の章において，仏身論を提示する．ナーガールジュナは『ラトナーヴァリー』(III.12)において二身説を提示したが，チャンドラキールティの仏身論は，ナーガールジュナの二身説に基づきながらも，唯識系の諸文献においてすでに三身説が組織づけられていた時代的背景も相まって，法身（dharmakāya）・受用身（saṃbhogakāya）・変化身（nirmāṇakāya）の三身説として展開される．本稿では，そのチャンドラキールティの仏身論を整理し，併せて，チャンドラキールティの説く仏身論と菩薩階梯との関わりを探っていきたい．

1．法身について　まずはじめに，他の仏身の根源であり，仏の法の本質そのものである法身について確認していきたい．

> 所知（*jñeya）という乾いた薪をあますところなく燃やしたことによって，寂静（*śānta）であり，〔すなわち，それが，〕勝者（仏陀）たちの法身（*dharmakāya）である．
> そのとき，生はなく滅もない．心〔と心所と〕が滅した彼（仏）は，〔受用〕身をもって現前なさる．(MA XII.8, 361.11-14, P 392a6-7, D 331b5-6)

法身は所知（jñeya）を超えた寂静なるものである．その法身は不生不滅であり，心と心所のはたらきが止滅している．「心・心所の止滅」とは諸仏を言い表すときにチャンドラキールティが多用する表現であり，二諦説のコンテクストにおいても「諸仏にとっては，諸法がいかなる仕方においても完全に正覚されているから，**心と心所のはたらき（*pracāra）が永久に止滅している**と認められる（MABh 108.9-11, P 304b7-8, D 255a4, ad VI-28）」と，勝義的な諸仏の状態を言い表している．チャンドラキールティは，この心のはたらき（pracāra）を分別（vikalpa）であると規定する[1]．その分別を離れた法身は法界において不動であるとされ，その法身が，物質的な仏身である受用身と変化身という色身をとって有情の前に立ち現れるのである．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

2．受用身について　さて次に，受用身に関して確認していきたい．

寂静なる身（受用身）は如意宝樹のように明らかになり，如意宝珠のように無分別である．有情が解脱するまで世間の円満のために常である．この〔受用身〕は戯論を離れた者に顕現する．（MA XII.9, 362.10-13, P 392b3-4, D 332a2-3）

当該偈頌では，法身と同様に寂静なる身として受用身が言い表される．受用身は，法身と離反することなく，法身そのままに，寂静なるものであるから，心・心所のはたらきも止滅していると説明される[2]．三身説のルーツである『大乗荘厳経論』では，受用身は，自利の円満を特徴とし，仏国土において法を享受する存在として説かれていたが[3]，チャンドラキールティにとっての受用身は，法身の本質を持ちつつ，菩薩たちに，仏法を示す身である点が重視される[4]．真理そのものである法身から流れ出て，可視的な存在となり，仏法を示す働きをもった色身として，受用身が立てられる．

チャンドラキールティは，受用身が，菩薩たちに可視的に現れつつも寂静なるものであることの理由を，成仏した後の時点での活動は存在しないからと述べる．そして，陶工の喩を示し，陶工が過去に努力して回転させたロクロが現在その余力でまわり続け，壷などを作り出す原因になるように，仏陀が菩薩時代に立てた誓願を原動力として，その成仏した時点での努力はなきままに，心の働きなきままに，受用身の不可思議なる行いが成さしめられるとする[5]．

この受用身という仏身は何より菩薩に法を享受させる仏身なのであり，凡夫や声聞などはその姿に相見えることはできない．チャンドラキールティは，このような受用身から法を享受することが可能な菩薩について以下のように述べる．

百の福徳の瑞相によって飾られたこの〔受用〕身は，**戯論（*prapañca）を離れ**，自らの福徳と智慧の資糧により，無垢なる**般若（*prajñā）**の鏡を得た**菩薩たち**にとってのみ存在が顕現するのであって，戯論を有するものたちにとってはそうではない．（MABh 363.7-11, P 392b8-393a1, D 332a6-7, ad XII.9）

当該箇所では受用身が立ち現れ，その仏身を見ることのできる菩薩に，般若を得て，戯論を寂滅した菩薩のみという二つの条件が付加されている．

さらにチャンドラキールティは受用身に続けて等流身（niṣyandakāya）と呼ばれる仏身を提示する．等流身は『入楞伽経』[6]，唯識系の論書[7]において受用身のシノニムとしての用例が確認できる．

チャンドラキールティはその仏身を寂静なる身である法身，もしくは，受用身から流れ出た仏身と考えているようである．その等流身のありさまは，次のよう

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

に示される．

牟尼自在者（仏陀）は，ほんの一時に，それ（法身と受用身）の等流という一つの色身に，すでに滅した自らの生まれの境涯を，明らかに混乱なく，あらゆる出来事（*vṛttānta）によって彩られたすべてを示される．(MA XII.10, 363.16-19, P 393a3-4, D 332b1-2)

仏陀は，一つの等流身に成仏するまでの過去世の境遇すべてを鏡の面に映すがごとく，一時に示すことができる．また，過去世のありさまのみならず，仏国土の様子も一つの身体にあらわし出すとする[8]．この等流身をもって，チャンドラキールティは四身説を提示したと考えることも可能かもしれない．しかし，『入中論複註』においてこの第10偈を註釈し「**一つの色身に**とは，受用身である（MAṬ P 404a7, D 334b3）」と述べられており，唯識文献における用例と同じく，受用身としてのある特定の現れ方が等流身と呼ばれると考えるのが妥当であろう．ただ，このようなはたらきを等流身に持たせる記述は，他の仏身論を説く文献においては見いだせず，チャンドラキールティの独自の解釈であるといえる．

3．変化身について　チャンドラキールティは変化身を，受用身とは異なり，あらゆる有情の対象となる仏身であると示し，次のように述べる．

あなたは，不動の身（法身）を持ち，再び，三有に出現して，諸々の変化〔身〕によって，到来と誕生と菩提と寂静の法輪をも示されて，同じく，あなたは，動きまわり放逸した行いをもちそれぞれが多くの縄によって縛られた世間を残らず慈悲によって涅槃に導く．(MA XII.35, 398.19-399.2, P 407a2-3, D 344b2-4)

チャンドラキールティは仏陀の寿命の長さを，すべての有情が救われるまでであると定義する[9]．しかし，有情を救う方便として，有情に合わせて，変化身という仕方で，誕生・正覚・般涅槃などを示すのである．このような変化身に関する記述は『大乗荘厳経論』[10]などにおいて示されている変化身と大差はない．

4．チャンドラキールティの菩薩階梯と受用身の関わり　以上，『入中論』第12章で展開された三身説について整理した．ここでは，受用身が，『入中論』において描かれる菩薩像とどのような関係を持っているのかについて若干の検討を試みたい．『入中論』は『十地経』(*Daśabhūmikasūtra*) において説かれた菩薩の修道階梯に基づき，十章までの各章が十地のそれぞれに対応しており，各地の菩薩の有様が説き示されている．その内，第六地（第六章）の菩薩は，縁起を考察することから般若波羅蜜に巧みとなり，戯論が寂滅した境地とされる滅尽定を得ると示される．一方，先に確認したように，チャンドラキールティにとって，受用身は，般若を得て，戯論を寂滅した菩薩に対してのみ現れると定義されていた．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

したがって，『入中論』の菩薩階梯に基づけば，受用身は，第六地以上の菩薩にのみ現れる仏身といえる．もしそうであるならば受用身は，唯識学派の論書においては，十地から成る菩薩地に入地した菩薩の集会に現れる仏身であると定義されているため[11]，この点にチャンドラキールティの受用身理解の特徴があると言える．以下その点を『入中論』に基づいて確認していきたい．

まず，第六地の菩薩の徳性が示されている第六章の第一偈の自注を確認する．

> 菩薩の第五地において，禅定波羅蜜が極めて清浄になることを得たので，第六地においては等至の心に住し，甚深なる**縁起という真実**を見る菩薩は，**般若波羅蜜**が極めて清浄になるので，**滅**を得ることになるのであって，それ以前に〔滅が得られるの〕ではない．〔五地までは〕般若〔波羅蜜〕が勝れていない故に．布施などの波羅蜜が最勝となっていることをもってしても，滅を得ることはできない．（MABh 73.6-12, P 292a6-8, D 244a4-6, ad VI-1）

『入中論』において説かれる第六地の菩薩は，縁起という真実を見ることから，般若波羅蜜に巧みとなり滅尽定を得るという修道プロセスを歩む．チャンドラキールティは十地と十波羅蜜の結びつきを重視し，菩薩は第一地で布施波羅蜜に巧みになることを始めとして，順次，十地の次第を経て，諸波羅蜜行に巧みとなるとする．したがって，受用身を見るために必要とされた般若波羅蜜は，第六地で巧みとなる．そして，チャンドラキールティは，般若波羅蜜に巧みになることにより得られるとされる「滅」に関しても，第六地ではじめて得ることが可能になると述べているが，その滅の境地において一切の戯論が寂滅するとも述べている[12]．それを換言すれば，第六地において般若波羅蜜に巧みになることによって戯論寂滅を体得すると言うことができる．

また，「縁起の真実を見る」という点については，『プラサンナパダー』で「縁起を見る」ことがそのまま戯論寂滅へのプロセスであると示される．

> 聖者たちにとって，あるがままの**縁起**を見ることがあるとき，〔その聖者たちにとって〕表現するものと表現されるべきものなどを特徴とする**戯論**が，あらゆる仕方で止滅するから，ここ（縁起）において，諸々の**戯論の寂滅**がある．したがって，まさにその縁起が，戯論寂滅と〔ナーガールジュナによって〕言われる．そして，そこ（縁起）において，**心と心所が活動していないとき**，知と所知といった言説が止滅しているので，生・老・死などの残りなき災いを離れたことになるから，吉祥である．（Pras 11.6-10）

当該箇所に示されている，縁起を見ることから戯論が寂滅するというのが，『入中論』の第六地の次第そのままであるとも言える．また，ここで主題となる縁起

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

に関しても，チャンドラキールティは『入中論』で興味深い定義をする．

> そ〔の縁起〕の自体は，無知の分厚い膜によって，智の眼がくまなく覆われた我々の対境（*viṣaya）に属するのではないのであって，第六〔地〕などより上の地に住する菩薩たちの対境（*viṣaya）に〔属する〕のである．(MABh 74.16-20, P 292b7-8, D 244b3-4, ad VI-2)

この記述から，戯論を寂滅するための手段である，縁起を見て，縁起の真理を体得することがそもそも，第六地より上位の菩薩でなければ不可能なこととして規定されていることが理解できる．このようなことから，受用身という仏身から仏法を享受することが可能となった，般若を得て戯論を寂滅した菩薩は，第六地以上の菩薩であると言い得るだろう．

まとめ　チャンドラキールティの仏身論は法身・受用身・変化身の三身説である．そして，受用身のある特定の現れ方が等流身と言われる．その三身の中で，受用身は，般若を得て，戯論を寂滅した菩薩にのみ現れる仏身である．対して，変化身はあらゆる有情の共通の対象である．受用身について『入中論』の菩薩階梯と併せて検討すると，第六地以上の菩薩でなければ般若を得て，戯論寂滅を得たとは言えないため，受用身という仏身に見えることができるのは第六地以上の菩薩ではないかと言える．

1）Pras 374.1, ad XVIII.9.　2）MABh 362.14-16, P 392b4-5, D 332a3, ad XII.9.　3）MSA IX.63.　4）MABh 359.6-10, P 391b1-2, D 331a2-3, ad XII.5.　5）MA XII.6-7, 360.9-16, P 391b8-392a2, D 331a7-b2.　6）*Laṅkāvatārasūtra*, Bunyiu Nanjio (ed.), 56.8-13.　7）SAVBh 121.7-12, ad IX.62.　8）MA XII.12-13, 364.10-17, P 393a7-8, D 332b4-5.　9）MABh 404.3-7, P 409a4-5, D 346a7-b1, ad XII.40.　10）MSA IX.64.　11）SAVBh 121.9-12, ad IX.62; MS X.1, 104.7-11.　12）MABh 342.17-19, P 385a5-6, D 325b1-2, ad MA VII.1.

［略号］

MA(Bh) *Madhyamakāvatāra*(*bhāṣya*), Louis de la Vallée Poussin (ed.), 1907-1912, D 3862, P 5263; MAṬ *Madhyamakāvatāraṭīkā*, D 3870, P 5271; MS *Mahāyānasaṃgraha*, G. Nagao (ed.), 1987; MSA *Mahāyānasūtrālaṃkāra*, Sylvain Lévi (ed.), 1907; Pras *Prasannapadā*, Louis de la Vallée Poussin (ed.), 1903-1913; SAVBh *Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya*, 西蔵文典研究会 (ed.), 1981.

〈キーワード〉　チャンドラキールティ，『入中論』，三身，受用身，等流身

（大谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service